

光代表作選集

第五卷

編集

お吟さまほか

読売新聞社



今東光代表作選集 第五卷
 短編集 (お吟さまほか)

昭和四十八年六月十日 第二刷

定価 元 500 円
 450 円

著 者 今 東 光

発行者 松 田 延 夫

発行所 読 売 新 聞 社

東京都千代田区大手町一の七の一 千 100

大阪市北区野崎町七七 千 530

北九州市小倉区明和町一の一 千 802

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

製函所 加藤製函株式会社

今東光代表作選集

第五卷

目

次

痩せた花嫁……………七

稚児……………一〇五

役僧……………一四三

破戒無慚……………一五七

人の果て……………一七五

お吟さま……………一八九

闘鶏……………二七五

甘い匂いをもつ尼……………三一七

師の御坊……………三三七

清貧の賦……………三五七

竹の子抄……………三七七

北斎秘画……………三九三

写楽の腕……………四一九

青葉木菟の歎き……………四三九

装丁
芹沢銈介

痩 せ た 花 嫁

愛染の燐

胡麻をばらまいたような帝釈^{たいしゃく}鳴^{なり}の一群が同じ方向に飛んだ。何の奇趣もない荒れ果てた田園の風物は、だんだんと燦^{きら}って薄墨色になった。暗くなった汽車の中で彼等は殆んど一言も交さなかった。石炭の火の粉が狐火のように窓辺に飛び散った。

玩具のような軽便鉄道はその終点に着いた。午後十一時二十五分。プラットホームに下りると初めて冷めたい野分を感じた。その風は武蔵野を冷えびえと吹き渡って来たのだ。彼等の乗ってきた列車は、車庫に帰って寝るためにまたゆるゆると動き出した。暗い中で赤い豆電燈がくるくと二三遍戸を描いた。それからぶつりと消えて仕舞った。欠けた月が中空に懸っていた。汽笛が泣いじやくった。足許で落葉がかさかさとうつろな音を立てたように思われた。しかしそんなところに落葉があるようにも思われなかった。

「ゴオゴオと聞えるのは何でしょう」

と彼女は言った。駝鳥の黒い羽根のボアをしているので、その声も不分明だった。

「あの音？ あれは汽車の音ですよ」

と彼は興味が無さそうに答えた。

「アラ。未だ聞えてヨ。貴方にも聞えるでしょう」

「いつまでだって聞えますサ」

「何故でしょう」

「線路に耳をあてると永いこと汽車の音が聞えるもんです。あれは東京に行く終列車の音ですよ」

「妾^{めかけ}にも小さい時分に、そんな記憶があつてヨ。あの時分も矢張り今のように東京へ行く音を聞いたもんですわ。そりゃア懐しかったのヨ」

「それは何時頃のことなんです」

「小さい頃。たぶん七ツか八ツだと思ふわ」

彼等はゆっくりと構内を出た。肩と肩とを押し合つて歩いた。彼は自分にも、そういう記憶があるのを話した。

「そう言えば僕だつて同じようなことがありました。その頃は僕、北海道の小樽という港にいたんです。そしてよく東京へ行く汽車の音を聞いたものです。しかしこの記憶は全く可笑しいじゃありませんか。何故といえば途中に一つ海峡があるのです。御存知でしょう、あの、津軽海峡という濃霧の多い奴です。しかし海峡のことなんか知らない頃のことです。それなのに僕はちゃんと東京へ行く音を聞き

分けました」

「まあ、おそろしく神秘的だわ」

「そうですとも……しかし斯ういう感情は誰にもあるものとみえますネ。僕がそうだ。貴女もそうだった。そうしてモルナーのリリオムという男が、矢張り同じ様な意味でウィーンに行く汽車の音を聞いたと言います」

「何のこと？」

「芝居の話ですがね。しかし」

「誰だって同じネ」

彼女はそういふと白い歯を出して笑った。偶然二人とも同じ感情を経験したことが妙に嬉しかった。こゝういふサンパティから、ともすれば種々な打明けた話の緒がほころびるもんだ。だから彼女は頻りに彼の話の聞いたがった。しかし折角の言葉を木枯が吹き飛ばした。

町はもう眠っていた。軒燈は油が不足して暗く疲労していた。そのために一つになっている二つの影の縫れが道に映らなかつた。びようびようと犬が吠えた。彼はインパネスの袖で、彼女の瘦せた身体を包んだ。うっかりすると二人とも風に吹き飛ばされる朽葉だった。

「何時だろう」

と彼は言った。息が白い霧になった。

「十一時二十八分だわ」

彼女は腕に巻いている時計を見て正確な時間を言った。

その手が伸びた。冷めたい左の紅差指に小粒の真珠でとりまいた青い石の指環がキラリと光った。そうして彼女の掌の中には一握のバニター・ケースがかくれている。その中に黛と白粉と彼の写真がはいっているのを彼は知っている。それから彼等は小石と破れ傘の捨ててある街道を歩いた。深潭のように青い夜空である。星が二ツ三ツ光っている。ところどころ鯨油に染みた障子に火影がさした。時とすると願人坊主に似た人影がゆらゆらと揺いで映った。冷めたく凍てついた道で、そこらあたりが暖かそうな、そこで落葉がキリキリと舞っていた。彼等はかすかに半鐘が鳴ったように聞いた。しかしそれは木枯が火の見櫓を根こそぎ揺ぶっていたのだ。そうして素性の知れない赤犬が弾丸のように走った。低い屋並は何だか道ばたへのめっていた。戸の軋む音が憂鬱に彼等の耳底を這いずり廻った。

彼等は此の夜更け、野分の道を左に曲ったり、右に折れたりして町外れの一軒の商人宿を探しあてた。行儀の悪い戸はガタピシと鳴った。軒燈にはハタゴ家と書いてあった。

彼女は、この汚い家を見た時に、みずばらしい彼等の結婚をわびしく思った。彼はしかし、今夜ほんとうに彼女を抱擁するのであるかと不思議にさえ考えていた。こゝういふ旅人宿はもしかすると彼等の夢をより色づけるように思われた。

暗い土間から十四の瞳がいっせいに光った。帳場格子の影にいる悪漢らしい四十男の亭主は、彼等がまるで風のように舞い込んだので頸を縮めた。実際、土間にも木枯が一杯だった。

「いらっしやい……」

亭主は不愛想に言う、少女がちよろよと枯木のようになり立ち上って彼等を案内した。真黒な広い梯子を上ると、左側の天井の低い四畳半に入れられた。

「おう。暗いランプだ」

近視眼の彼は黄色い幽かな灯を見ると呟いた。それに腰から下はいつとなく枯草のようになっていた。この汚い宿屋はまるで田圃のようだ。床の間には軸物もなく、歪な花瓶には梅の枯枝が一本立っている。窓の下で水のせせらぎが聞こえ、魂の内景はうらぶれて泣きたいのを堪えている。この赤土の上に咲いている彼女は、消えそうな灯をまぶしがり、肌を露わした畳に彼の根が生えた。

炭火が小さい部屋を暖めると彼女はボアを脱した。彼女は無造作に結った髪をなおした。前に垂れた一寸ばかりの癖毛の下から、長い睫毛の瞳を耀かした。それから手袋を脱いだ。長い指が桃色に冷えている。コートを脱いだ。彼女は派手な茶格子のお召に、銀と藍の横縞の帯をしめ、濃紫の襟の下から赤い襦袢をのぞかせている。そうして緋の裏のついた黒縮緬の羽織をきて、円い頸を横に引いた。彼

女は茶を淹れた。彼は宿帳に名前と年を書き入れた。しかし彼女はこういう感情に調和しない。その間、灰に字を書いたり消したり、いよいよさびしくなりまされた。しかし彼は、山脈と地形のことを考えていた。秩父風の吹き荒ぶ中を、この女を連れて何処へ行こうかとうつとりした。彼女は、顔面筋肉だけ見ると笑っているように見えた。

「あたし達は共犯者というものです。か。そうなんですか」

彼女は幾分きまり悪るげに言った。彼は共犯者というむごい言葉に脅えた。

「そういう言い方をしちゃ不可いでしょう。しかし僕もそれを望んでいるのですが」

彼女は瞬間、身震いをしたらしく思われた。そうして用心深く垂れ下ってくる髪の毛をかきあげて身体を退らせた。彼はこみ上げてくる熱情を漸くこらえていた。

「妾の考えもそうですわ」

眼を見交した。彼等は目に見えぬ準繩の埒を見たと思つた。その刹那嬉しく、辛かった。

彼女は、自分の面前にいる、掠奪者をつくづくと眺めた。彼はやすやすと自分の魂を奪った男だ。そうして憎むべきなのを暫らく忘れて、憤然と彼の全容を観察した。

彼の頭の毛は蓬々と伸び、幾日か剃らない頬には、あざらしのような髯が生えていた。彼の強度な近視眼は、心持

ち膨れた瞼の下から精悍な光りを放った。彼は獲物を狙う獵人のように脊を弓なりに曲げ、大きな声で話した。

彼女は彼をたった一目見た時から、彼を愛している自分を見出した。この事は彼女を浅ましく思わせ、悲しませた。彼女は空想好きな女だけに、非常に疑い深く、自身で覚らないで疑い深くあつた。彼女はそれほど純真だつた。そうして切なくなつて彼に打ち明けた。

「妾はいけない女でしょうか。ほんとうはいけない女のように思われますの。しかし妾は貴方が好きヨ。それに妾は疑い深い。それなのに妾の疑懼を、どうしても制肘することが出来なかつたのヨ」

彼の黒耀石のような眼を見つめながら、すっかり言い終ると、彼女の胸の痛みが消えたように思つた。しかし少し許り不安が芽を吹いた。それで

「貴方は妾を、こんなに愛したんだわ」

と言つた。そうして世間では、これを気まぐれだといふであらうことを考えると遺憾に思つた。そうして若しかすると彼までが、彼女を気まぐれな雌だと思ひやしないかと思つた。しかし本当には、誰がこんな危い気まぐれを起すだろうと考へた。

「わかつて頂戴ネ」

と彼女は念を押すように、やるせなく彼に言つた。

彼女は何にも知らずに、恋を夢見ることさえ許されずに

結婚して仕舞つた。日本の家庭の処女達は、こうして幾多の佻しい姿をした獣に食べられた。実際、おそろしく甘い食物だつた。彼女が、それを悲しい現実の経験だと知つた時には、もう一人の女の児が生れてゐた。彼女の欲しなかつた者だつた。

彼女は、自分が処女だつた時には、自分の価値を計量するに比較する何物も持たなかつた。そうしてその代りに、やんやと彼女の美しさを囁し立てて呉れる男を沢山に周囲に見出した。彼女はいつも自分の頬が桃色にほてっている印象を持つてゐる。そうして彼女の多くの求婚者は、この見事な装飾品を盗もうとした。

彼女は、或る富豪の息子に嫁いだ。この何かしら欠けてゐる者のところへ、それを補うために娶られたようなものだつた。

これ等の人間が親となつたのは、余りに不用意であつた。こういう子供の運命を考えると彼女は慄然とした。そうして少しづつ此の生活を打ち壊そうと図つた。

彼女の夫は、それに気がつくこと心の平静を失つた。そうして三年間の退屈で不安な別居生活が始まつた。

彼女の夫は間もなく、彼女の嫉妬心を煽るために、そうして多分にそれが口実であり遁辭ではあつたが、醜い女中を孕ませた。

「これが当然の帰結だ。そして夫は口説き屋さんなのだ。あの癖が未だ抜けないのだ」

と肚の中で冷笑しきつた。しかし此の事實は彼女への非難になった。

「……だって、あれはあの癖を自分でもどうすることが出来ないのだ」

と思った。男が、ひどい時には自分ながらどうにもならなくなるものだということを知ったのも、この時からだった。彼女は、そういう智慧を自分自身のためにうとましく思った。

彼女は、このピュートレスクのない生活で或る朝、桃色の血を吐いた。

彼女は、いつとなく真に自分を不徳にして貞操な女だと思ひ込むようになった。彼女は、この無能な一匹の雄のために、予め自分の生涯を担保にしたように信じていた。このような従順さが、重態になるものと気がついた時には、彼女は鎌倉の別荘で蝕める肺を養っていたのである。女中の子は死んで生れた。

彼女は美しい血痰を見ると、それだけ自分の多感な心が殺れてゆくように思われた。そうして一方、この生きてゆくことを限定されている自分に、未だ人生の幸福というものをも夢想させ、その存在を思わしめるものは恋愛だけだった。恋の中に求めなくてはならないようにさえ思われた。危惧を感じ、恋を恋する憐れな心を彼女は譬えようも

なく不憫に思った。

「妾はどうかしている……」

彼女は喘ぐようにして呟いた。彼女の心の中の激しい争いは、誰かを愛すまいとする苦勞だった。

その最中、小原子爵が彼女に彼を紹介した。彼女は聊かの小康を得て、東京の郊外に移り住んでいた。彼は自分の思う通りの事を語って興じた。しかし彼女は殆ど笑わなかった。彼女は未知の男の前で、平気で冗談を聞き流しているほど平静ではいられたなかった。彼女は、そういう男達を幾人か見て来た。そうして

（この人でもないようだ——）

と思った。気づかぬ振をして仔細に観察し研究することを感じた。同時に彼女は笑わない女になった。彼女は彼の前ではおそろしく冷淡に、もしかすると残酷なほど無関心に振舞ってやった。彼女はしかし、彼の前でだけ此の無頓着に振舞うことを苦しく思った。彼は小原子爵と、こんなことを言い合っていた。

「僕は極端に綺麗な女の人を好きになれないのだ。こういう美人は、どうかすると少しも美しい感じを与えないという不幸さがあるものだ。では、どういう女性が美しいことになるんだらう。そりゃア恋をしている女だ」

何のきっかけで彼等がこんな話をし合っているのか彼女には解らなかつた。少し氣障だと思ったが、これが斯うい

う男達の社交術なんだろうと思った。それでも話そのものが満更ら退屈なものでもなさそうなので

「何故、貴方はそう仰有りたいの」

と訊いた。彼はためらい気もなく彼女を見つめた。彼はその時、彼女の連翹色の瞳を見て、その蒼味がかった、魅力に富んでいる表情から、彼女がそういう問題で心が乱れているのではないかと想像した。

「そのことですか、奥さん。何故といって恋をする女性は大抵、死への一投足からはじめます。死の直ぐ隣りまで行き詰めるのです。同時にこれは生きはじめの一步であるとも言えるでしょう。女はこうして生きることを望み、自分の運命を果そうと思います」

「しかし危い道ですネ」

「そうです。だからグルモンは言うのです。自分の闇の道を知らず、歎歎きながら、この道を求めている女は美しいものだということです」

彼女は、彼が真面目くさって然ういうのを可笑しく思った。しかし矢張り笑えなかった。彼女は自分の希望も、自分の幸福も、その辺にあるように考えられながら、無意識的にそう云う希望を持つことを拒みなかった。彼はしかし、彼女に苦々しいことを言ったのではないかと思った。けれども実は彼女のその無言は、心乱れて恍惚とした沈黙だったのだ。

彼等は、それから外に出た。大気の強い青空で、遠雷が

鳴っていた。柏の手堅い葉叢に日光が滲っていた。藤の花が乳房のようにゆさゆさと揺れ、彼女は夾竹桃のようにはじめて笑った。

彼女は自分が幸福であるかどうかということを考えた。

彼女は彼に会ってから、少しずつ笑うことが出来るようになった。笑いの内容が、こんなに幸福感に充滿しているものだと今まで考えられないことだったのだ。しかし彼女は自分の趣味として、女としてのデリカシーが二つの眸の色のために心中を見透されたりすることが厭だった。それゆえに彼女は大理石の女のように、ただほんのりと幽かな血潮が両頬に現れるのを彼は美しく思うのであった。

彼女は、自分の運命に逆うのと、順ずるのと何れに幸福があるだろうかと思った。幸福という化物が、彼女の陰気な目に屢々映った。しかし、その姿は常に不確かだった。

「妾はあの人のものだ……」

一層そうなるには欺されても好いという気がした。そうして若し仮にそうだったとして、彼女はそのために騙そうと彼が思うような好い物を何一つ持っていないように思われた。この騙すためのシャルムもなくなつて仕舞ったのではないかという想いが彼女には悲しかった。

「妾は人妻だ」

「妾は子持ちだ」

「女の子と男の児——」